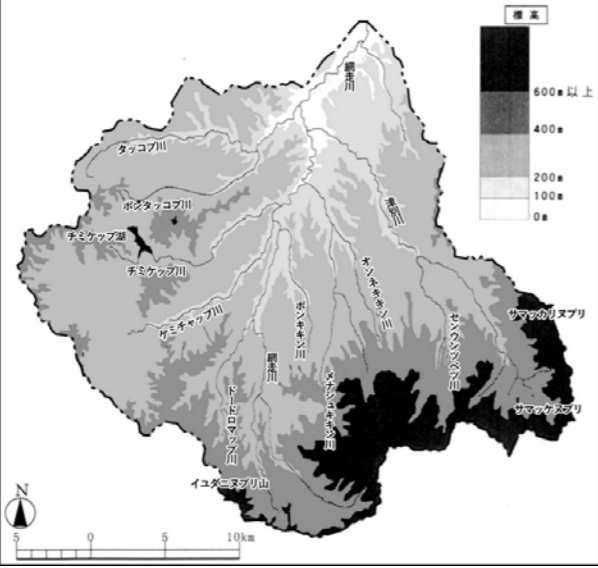


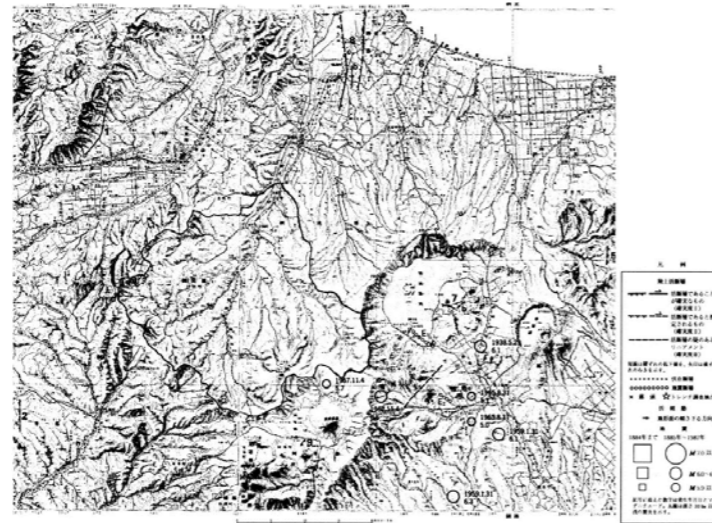
現行（令和2年8月（平成31年3月））	修正案（令和6年1月時点）	備考
<p>第2章 津別町の概況</p> <p>第1節 町の地勢</p> <p>1 位置・面積</p> <p>本町は、北海道の東部、オホーツク総合振興局管内の南東部にあり、北緯43度27分から43度46分、東経143度46分から144度14分に位置し、東西37.2km、南北34.1kmで、総面積は716.80km²である。</p> <p>北西部を北見市、訓子府町に、南西部は陸別町、足寄町に、北東部は美幌町に、東部は弟子屈町に、南部は釧路市（旧阿寒町）に接し、東部、南部の町界付近は一部阿寒摩周国立公園に隣接している。</p> <p>2 地勢</p> <p>本町は、網走川上流域の扇状に広がる河川により形成された平地と、それを取り囲む山地によって形成されている。</p> <p>山地は、南東部と東部の阿寒、屈斜路両カルデラの外輪山山地、南西部と西部の山地、これらの山地に取り囲まれた丘陵性山地からなっている。</p> <p>平地は活汲地区、津別地区を除いては、各河川沿いに河岸段丘が細長く谷あい形成されている。</p>  <p style="text-align: center;">津別町の地形</p> <p>3 地質</p> <p>地層は、基礎となっている先白亜紀の日高累層群、第3紀の陸別層、達美層、津別層、センウンツベツ川層、第4紀の軽石質火山灰層から段丘地積物までの堆積物に大きく3つに分けられるが、これらの堆積岩に併せて、第3紀に噴出した火成岩、第4紀に噴出した火成岩がさまざまに分布している。</p> <p>本町には、活断層は見つかっておらず、周辺にも20km以内には活断層は見つかっていない。</p>	<p>第2章 津別町の概況</p> <p>第1節 町の地勢</p> <p>第1 位置・面積</p> <p>本町は、北海道の東部、オホーツク総合振興局管内の南東部にあり、北緯43度27分から43度46分、東経143度46分から144度14分に位置し、東西37.2km、南北34.1kmで、総面積は716.80km²である。</p> <p>北西部を北見市、訓子府町に、南西部は陸別町、足寄町に、北東部は美幌町に、東部は弟子屈町に、南部は釧路市（旧阿寒町）に接し、東部、南部の町界付近は一部阿寒摩周国立公園に編入している。</p> <p>第2 地勢</p> <p>本町は、網走川上流域の扇状に広がる河川により形成された平地と、それを取り囲む山地によって形成されている。</p> <p>山地は、南東部と東部の阿寒、屈斜路両カルデラの外輪山山地、南西部と西部の山地、これらの山地に取り囲まれた丘陵性山地からなっている。</p> <p>平地は活汲地区、津別地区を除いては、各河川沿いに河岸段丘が細長く谷あい形成されている。</p>  <p style="text-align: center;">津別町の地形</p> <p>第3 地質</p> <p>地層は、基礎となっている先白亜紀の日高累層群、第3紀の陸別層、達美層、津別層、センウンツベツ川層、第4紀の軽石質火山灰層から段丘地積物までの堆積物に大きく3つに分けられるが、これらの堆積岩に併せて、第3紀に噴出した火成岩、第4紀に噴出した火成岩がさまざまに分布している。</p> <p>本町には、活断層は見つかっておらず、周辺にも20km以内には活断層は見つかっていない。</p>	

現行（令和2年8月（平成31年3月））

津別町の地質年表

地質時代	年代	地層	火成岩類	変成岩類その他	北海道の代表的な地層
新第三紀	1000000000	沖積層			沖積層
		第四紀			第四紀
		更新世			更新世
		中更新世			中更新世
		新更新世			新更新世
		旧更新世			旧更新世
		中更新世			中更新世
		新更新世			新更新世
		旧更新世			旧更新世
		更新世			更新世
第三紀	200000000	阿寒カルデラ形成		阿寒カルデラ形成	阿寒カルデラ形成
		阿寒カルデラ形成		阿寒カルデラ形成	阿寒カルデラ形成
		阿寒カルデラ形成		阿寒カルデラ形成	阿寒カルデラ形成
		阿寒カルデラ形成		阿寒カルデラ形成	阿寒カルデラ形成
		阿寒カルデラ形成		阿寒カルデラ形成	阿寒カルデラ形成
		阿寒カルデラ形成		阿寒カルデラ形成	阿寒カルデラ形成
		阿寒カルデラ形成		阿寒カルデラ形成	阿寒カルデラ形成
		阿寒カルデラ形成		阿寒カルデラ形成	阿寒カルデラ形成
		阿寒カルデラ形成		阿寒カルデラ形成	阿寒カルデラ形成
		阿寒カルデラ形成		阿寒カルデラ形成	阿寒カルデラ形成
白垩紀	100000000	白垩紀		白垩紀	白垩紀
		白垩紀		白垩紀	白垩紀
		白垩紀		白垩紀	白垩紀
		白垩紀		白垩紀	白垩紀
		白垩紀		白垩紀	白垩紀
		白垩紀		白垩紀	白垩紀
		白垩紀		白垩紀	白垩紀
		白垩紀		白垩紀	白垩紀
		白垩紀		白垩紀	白垩紀
		白垩紀		白垩紀	白垩紀
中生代	20000000	中生代		中生代	中生代
		中生代		中生代	中生代
		中生代		中生代	中生代
		中生代		中生代	中生代
		中生代		中生代	中生代
		中生代		中生代	中生代
		中生代		中生代	中生代
		中生代		中生代	中生代
		中生代		中生代	中生代
		中生代		中生代	中生代
古生代	2000000	古生代		古生代	古生代
		古生代		古生代	古生代
		古生代		古生代	古生代
		古生代		古生代	古生代
		古生代		古生代	古生代
		古生代		古生代	古生代
		古生代		古生代	古生代
		古生代		古生代	古生代
		古生代		古生代	古生代
		古生代		古生代	古生代
前寒武紀	200000	前寒武紀		前寒武紀	前寒武紀
		前寒武紀		前寒武紀	前寒武紀
		前寒武紀		前寒武紀	前寒武紀
		前寒武紀		前寒武紀	前寒武紀
		前寒武紀		前寒武紀	前寒武紀
		前寒武紀		前寒武紀	前寒武紀
		前寒武紀		前寒武紀	前寒武紀
		前寒武紀		前寒武紀	前寒武紀
		前寒武紀		前寒武紀	前寒武紀
		前寒武紀		前寒武紀	前寒武紀

津別町周辺の活断層と地震発生地点



4 雌阿寒岳

(1) 雌阿寒岳の概要

雌阿寒岳（標高1,499m）は、阿寒カルデラの南西壁上に生じた火山で、玄武岩・安山岩・デイサイトなどからなる多数の火山体（主に成層火山）で構成されている。

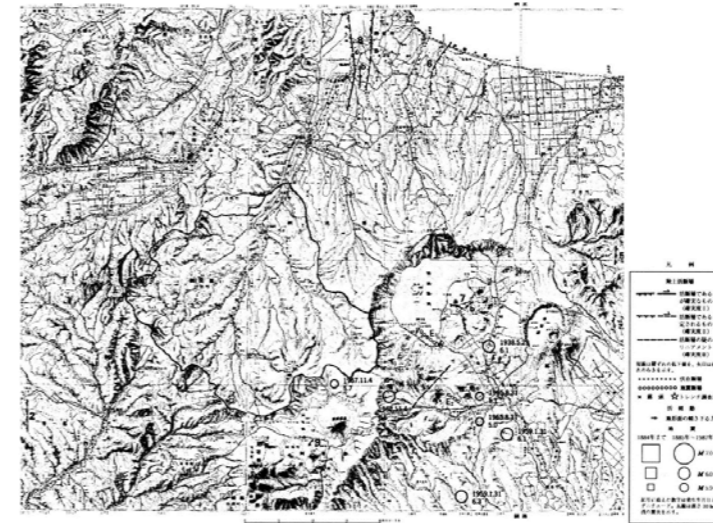
雌阿寒岳山頂部のポンマチネシリ火口は、西側の赤沼火口と東側の旧火口からなり、赤沼火口は直径約400m、深さ120mから200mで、火口底に褐色の赤沼をたたえている。東側の旧火口は、その後の赤沼火口生成時の噴出物により厚く埋積され浅く平坦で、直径約450mの半円形をしている。旧火口の東

修正案（令和6年1月時点）

津別町の地質年表

地質時代	年代	地層	火成岩類	変成岩類その他	北海道の代表的な地層
新第三紀	1000000000	沖積層			沖積層
		第四紀			第四紀
		更新世			更新世
		中更新世			中更新世
		新更新世			新更新世
		旧更新世			旧更新世
		中更新世			中更新世
		新更新世			新更新世
		旧更新世			旧更新世
		更新世			更新世
第三紀	200000000	阿寒カルデラ形成		阿寒カルデラ形成	阿寒カルデラ形成
		阿寒カルデラ形成		阿寒カルデラ形成	阿寒カルデラ形成
		阿寒カルデラ形成		阿寒カルデラ形成	阿寒カルデラ形成
		阿寒カルデラ形成		阿寒カルデラ形成	阿寒カルデラ形成
		阿寒カルデラ形成		阿寒カルデラ形成	阿寒カルデラ形成
		阿寒カルデラ形成		阿寒カルデラ形成	阿寒カルデラ形成
		阿寒カルデラ形成		阿寒カルデラ形成	阿寒カルデラ形成
		阿寒カルデラ形成		阿寒カルデラ形成	阿寒カルデラ形成
		阿寒カルデラ形成		阿寒カルデラ形成	阿寒カルデラ形成
		阿寒カルデラ形成		阿寒カルデラ形成	阿寒カルデラ形成
白垩紀	100000000	白垩紀		白垩紀	白垩紀
		白垩紀		白垩紀	白垩紀
		白垩紀		白垩紀	白垩紀
		白垩紀		白垩紀	白垩紀
		白垩紀		白垩紀	白垩紀
		白垩紀		白垩紀	白垩紀
		白垩紀		白垩紀	白垩紀
		白垩紀		白垩紀	白垩紀
		白垩紀		白垩紀	白垩紀
		白垩紀		白垩紀	白垩紀
中生代	20000000	中生代		中生代	中生代
		中生代		中生代	中生代
		中生代		中生代	中生代
		中生代		中生代	中生代
		中生代		中生代	中生代
		中生代		中生代	中生代
		中生代		中生代	中生代
		中生代		中生代	中生代
		中生代		中生代	中生代
		中生代		中生代	中生代
古生代	2000000	古生代		古生代	古生代
		古生代		古生代	古生代
		古生代		古生代	古生代
		古生代		古生代	古生代
		古生代		古生代	古生代
		古生代		古生代	古生代
		古生代		古生代	古生代
		古生代		古生代	古生代
		古生代		古生代	古生代
		古生代		古生代	古生代
前寒武紀	200000	前寒武紀		前寒武紀	前寒武紀
		前寒武紀		前寒武紀	前寒武紀
		前寒武紀		前寒武紀	前寒武紀
		前寒武紀		前寒武紀	前寒武紀
		前寒武紀		前寒武紀	前寒武紀
		前寒武紀		前寒武紀	前寒武紀
		前寒武紀		前寒武紀	前寒武紀
		前寒武紀		前寒武紀	前寒武紀
		前寒武紀		前寒武紀	前寒武紀
		前寒武紀		前寒武紀	前寒武紀

津別町周辺の活断層と地震発生地点



第4 雌阿寒岳

1 雌阿寒岳の概要

雌阿寒岳（標高1,499m）は、阿寒カルデラの南西壁上に生じた火山で、玄武岩・安山岩・デイサイトなどからなる多数の火山体（主に成層火山）で構成されている。

雌阿寒岳山頂部のポンマチネシリ火口は、西側の赤沼火口と東側の旧火口からなり、赤沼火口は直径約400m、深さ120mから200mで、火口底に褐色の赤沼をたたえている。東側の旧火口は、その後の赤沼火口生成時の噴出物により厚く埋積され浅く平坦で、直径約450mの半円形をしている。旧火口の東

現行（令和2年8月（平成31年3月））	修正案（令和6年1月時点）	備考
<p>壁近くには水をたたえた直径約70mの青沼火口がある。また、南壁には1955年以降の噴火でできた火口群がある。</p> <p>雌阿寒岳中央部には、直径約1.1kmの中マチネシリ火口があり、ポンマチネシリ火口とともに現在も噴気活動が活発である。</p> <p>雌阿寒岳は、記録に残る1955年以降も小噴火を繰り返しており、札幌管区気象台は火山活動を24時間体制で常時観測・監視している。</p> <p>（2）雌阿寒岳の噴火記録</p> <p>昭和時代初頭の1927年以降、鳴動や地震活動が次第に活発化した。1955年11月19日、ポンマチネシリ火口内で有史以降最初の噴火が起こった。この噴火はポンマチネシリ火口南東壁近くの火口底で起こり、火口壁に沿って4つの火口（第1から第4）が開いた。当時、雌阿寒岳中央部の中マチネシリ火口内では阿寒硫黄鉱山が稼働中であったが、幸いにも犠牲者を出さずに済んだ。</p> <p>その後もポンマチネシリ火口内では1959年にかけて小噴火が繰り返されたが、この間に中マチネシリ火口内の大噴火及びその付近でも小規模な水蒸気爆発が起こった。これらのうち、1956年6月15日に起きたポンマチネシリ火口内の噴火は、この活動期中最も大きい規模のもので、降灰域が60kmから100kmに達した。また、これらの噴火により第1火口は拡大し、第3・第4火口は合体した。</p> <p>ポンマチネシリ及び中マチネシリ火口内では1960年から1966年にかけても活発な噴気活動が続き、しばしば熱泥や火山灰の噴出が見られた。その後、活動は衰微し小康状態となったが、1973年から地震が群発するようになった。1983年からはポンマチネシリ火口の噴煙が活発化し、1987年には第1火口の温度が上昇して10月に510℃を観測した。翌1988年1月から2月にはポンマチネシリ火口内で小噴火が時々発生し、風向きにより阿寒湖畔付近にも微量の降灰があった。その後も地震活動はやや活発に経過し、1996年11月21日に小規模な水蒸気爆発があり、阿寒町（現釧路市）・足寄町・美幌町・津別町で降灰が確認された（噴出物総量：推定36,000 t）。さらに1998年11月9日、2006年3月21日、2008年11月18日及び28日から29日にも小噴火が起こった。</p> <div data-bbox="765 1266 1397 1312" style="border: 1px solid black; text-align: center;">資料9 雌阿寒岳の火山活動年表</div> <p>5 気象</p> <p>気候は内陸型気候であり、気温については、夏冬・昼夜の寒暖の差が著しく、オホーツク海に流氷が接近する1～2月の厳寒期は氷点下20度前後を最低とし、5月から次第に気温が上昇し、7～8月の30度前後が最高で、平均気温は6度程度となっている。</p> <p>降水量は年間600～1,000mm程度と全国平均より少なく、降雪は11月下旬に始まり、12月中旬には根雪となり、5月上旬には積雪が0 cmとなる。</p> <p>風向については、年間を通じて南よりの風が多くみられる。</p> <div data-bbox="765 1675 1397 1722" style="border: 1px solid black; text-align: center;">資料12 津別町における気温・降水量等</div> <p>第2節 町の過去の災害</p> <p>本町の自然条件などによる災害には、火山による降灰、融雪出水災害、冷害、雪害、地すべり等がある。これらの災害の特性と過去の災害記録は次のとおりである。</p>	<p>壁近くには水をたたえた直径約70mの青沼火口がある。また、南壁には1955年以降の噴火でできた火口群がある。</p> <p>雌阿寒岳中央部には、直径約1.1kmの中マチネシリ火口があり、ポンマチネシリ火口とともに現在も噴気活動が活発である。</p> <p>雌阿寒岳は、記録に残る1955年以降も小噴火を繰り返しており、札幌管区気象台は火山活動を24時間体制で常時観測・監視している。</p> <p>2 雌阿寒岳の噴火記録</p> <p>昭和時代初頭の1927年以降、鳴動や地震活動が次第に活発化した。1955年11月19日、ポンマチネシリ火口内で有史以降最初の噴火が起こった。この噴火はポンマチネシリ火口南東壁近くの火口底で起こり、火口壁に沿って4つの火口（第1から第4）が開いた。当時、雌阿寒岳中央部の中マチネシリ火口内では阿寒硫黄鉱山が稼働中であったが、幸いにも犠牲者を出さずに済んだ。</p> <p>その後もポンマチネシリ火口内では1959年にかけて小噴火が繰り返されたが、この間に中マチネシリ火口内の大噴火及びその付近でも小規模な水蒸気爆発が起こった。これらのうち、1956年6月15日に起きたポンマチネシリ火口内の噴火は、この活動期中最も大きい規模のもので、降灰域が60kmから100kmに達した。また、これらの噴火により第1火口は拡大し、第3・第4火口は合体した。</p> <p>ポンマチネシリ及び中マチネシリ火口内では1960年から1966年にかけても活発な噴気活動が続き、しばしば熱泥や火山灰の噴出が見られた。その後、活動は衰微し小康状態となったが、1973年から地震が群発するようになった。1983年からはポンマチネシリ火口の噴煙が活発化し、1987年には第1火口の温度が上昇して10月に510℃を観測した。翌1988年1月から2月にはポンマチネシリ火口内で小噴火が時々発生し、風向きにより阿寒湖畔付近にも微量の降灰があった。その後も地震活動はやや活発に経過し、1996年11月21日に小規模な水蒸気爆発があり、阿寒町（現釧路市）・足寄町・美幌町・津別町で降灰が確認された（噴出物総量：推定36,000 t）。さらに1998年11月9日、2006年3月21日、2008年11月18日及び28日から29日にも小噴火が起こった。</p> <div data-bbox="2041 1266 2674 1312" style="border: 1px solid black; text-align: center;">資料9 雌阿寒岳の火山活動年表</div> <p>第5 気象</p> <p>気候は内陸型気候であり、気温については、夏冬・昼夜の寒暖の差が著しく、オホーツク海に流氷が接近する1～2月の厳寒期は氷点下20度前後を最低とし、5月から次第に気温が上昇し、7～8月の30度前後が最高で、平均気温は6度程度となっている。</p> <p>降水量は年間600～1,000mm程度と全国平均より少なく、降雪は11月下旬に始まり、12月中旬には根雪となり、5月上旬には積雪が0 cmとなる。</p> <p>風向については、年間を通じて南よりの風が多くみられる。</p> <div data-bbox="2041 1675 2674 1722" style="border: 1px solid black; text-align: center;">資料12 津別町における気温・降水量等</div> <p>第2節 町の過去の災害</p> <p>本町の自然条件などによる災害には、火山による降灰、融雪出水災害、冷害、雪害、地すべり等がある。これらの災害の特性と過去の災害記録は次のとおりである。</p>	

現行（令和2年8月（平成31年3月））	修正案（令和6年1月時点）	備考
<p>1 地震</p> <p>1936年（昭和11年）5月に相生付近で、最大震度2程度の局地的な地震が多発した。また、1976年（昭和51年）1月4日から5日にも、恩根左沢国有林内を震源とする最大震度4の地震が多発している。プレート間地震（海溝型地震）としては、1952年（昭和27年）の十勝沖地震、「1968年（昭和43年）十勝沖地震」、「1973年（昭和48年）6月17日根室半島沖地震」、「2003年（平成15年）十勝沖地震」があるが、被害はなかった。</p> <p>2 火山災害</p> <p>1962年（昭和37年）6月30日に十勝岳噴火により、本岐で6時ころから11時ころにかけて、噴煙が覆い1～2cmの降灰による被害が出ている。</p> <p>雌阿寒岳では有史以降最初の噴火が発生した1955年（昭和30年）以降、しばしば小噴火を繰り返しているが、津別町内に降灰はあったものの被害は発生していない。</p> <p>3 融雪出水災害</p> <p>山地が融雪期に入る4月下旬から5月上旬にかけて最も多く発生し、山腹の積雪が急速にとけて平地への融雪による水が流れ、側溝その他の小河川の流れを活発にして一挙に出水する。網走川流域に多く、家屋の浸水や橋梁の破損、農地の流出などの被害をもたらす。</p> <p>4 雪害</p> <p>本町の雪質は密度が小さく、乾雪が多いため、寒冷な気候条件下では根雪期間が長い。連続する降雪、吹雪は交通障害をもたらし、また、融雪の遅れは農期間・植物生育期間の短縮となり、凶作の一因となるほか、農作物に雪枯病をもたらす。</p> <p>2004年（平成16年）1月には、13日から16日にかけて豪雪に見舞われ、最深積雪で165cmを記録するなど国道・道道・町道のほとんどが数日間通行止めとなったため、住民生活上に大きな影響を与え、特に農業関係において施設損壊・交通遮断による生乳廃棄等で大きな被害が発生したほか、公共施設等においても屋根損壊等の被害があった。</p> <p>5 冷害</p> <p>オホーツク海高気圧の影響を受け、7月、8月に低温少雨の気候となると、農作物の生育に大きな障害を与え冷害となる。6月の霜害とともに本町の農業生産を左右する。</p> <p>6 暴風雨災害</p> <p>台風、集中豪雨による被害は少ないものの、台風では特に9月、10月の収穫期の農作物被害、集中豪雨では通称『がり』を生じ、小河川の決壊による農地への流水・冠水等の被害が発生している。</p> <p>7 土砂災害</p> <p>1953年（昭和28年）5月31日に、道道津別陸別線を本岐市街から陸別に向かって8kmほどの北側の山地で地すべりが発生し、土崩が土石流となり、造材飯場を押しつぶし、死者16人の被害を出した。そのほか、1961年（昭和36年）に最上、1962年（昭和37年）に達美、1969年（昭和44年）には最上のポンタッコブ川右岸などで地すべりが発生している。</p> <p>8 火災</p> <p>火災は4月、5月の乾燥期に発生する火災と、11月から翌年1月までの暖房使用に起因する火災が多い。また、本町の地場産業である木工場関係の火災も多く、被害も大きなものとなっている。林野火災は近年、減少してきているが、最も乾燥し強風の多い5月に多く、たばこ、造林の火入れ、ごみ焼等が主な原因となっている。</p>	<p>第1 地震</p> <p>1936年（昭和11年）5月に相生付近で、最大震度2程度の局地的な地震が多発した。また、1976年（昭和51年）1月4日から5日にも、恩根左沢国有林内を震源とする最大震度4の地震が多発している。プレート間地震（海溝型地震）としては、「1952年（昭和27年）十勝沖地震」、「1968年（昭和43年）十勝沖地震」、「1973年（昭和48年）6月17日根室半島沖地震」、「2003年（平成15年）十勝沖地震」があるが、被害はなかった。</p> <p>第2 火山災害</p> <p>1962年（昭和37年）6月30日に十勝岳噴火により、本岐で6時ころから11時ころにかけて、噴煙が覆い1～2cmの降灰による被害が出ている。</p> <p>雌阿寒岳では有史以降最初の噴火が発生した1955年（昭和30年）以降、しばしば小噴火を繰り返しているが、津別町内に降灰はあったものの被害は発生していない。</p> <p>第3 融雪出水災害</p> <p>山地が融雪期に入る4月下旬から5月上旬にかけて最も多く発生し、山腹の積雪が急速にとけて平地への融雪による水が流れ、側溝その他の小河川の流れを活発にして一挙に出水する。網走川流域に多く、家屋の浸水や橋梁の破損、農地の流出などの被害をもたらす。</p> <p>第4 雪害</p> <p>本町の雪質は密度が小さく、乾雪が多いため、寒冷な気候条件下では根雪期間が長い。連続する降雪、吹雪は交通障害をもたらし、また、融雪の遅れは農期間・植物生育期間の短縮となり、凶作の一因となるほか、農作物に雪枯病をもたらす。</p> <p>2004年（平成16年）1月には、13日から16日にかけて豪雪に見舞われ、最深積雪で165cmを記録するなど国道・道道・町道のほとんどが数日間通行止めとなったため、住民生活上に大きな影響を与え、特に農業関係において施設損壊・交通遮断による生乳廃棄等で大きな被害が発生したほか、公共施設等においても屋根損壊等の被害があった。</p> <p>第5 冷害</p> <p>オホーツク海高気圧の影響を受け、7月、8月に低温少雨の気候となると、農作物の生育に大きな障害を与え冷害となる。6月の霜害とともに本町の農業生産を左右する。</p> <p>第6 暴風雨災害</p> <p>台風、集中豪雨による被害は少ないものの、台風では特に9月、10月の収穫期の農作物被害、集中豪雨では（削除）、小河川の決壊による農地への流水・冠水等の被害が発生している。</p> <p>第7 土砂災害</p> <p>1953年（昭和28年）5月31日に、道道津別陸別線を本岐市街から陸別に向かって8kmほどの北側の山地で地すべりが発生し、土崩が土石流となり、造材飯場を押しつぶし、死者16人の被害を出した。そのほか、1961年（昭和36年）に最上、1962年（昭和37年）に達美、1969年（昭和44年）には最上のポンタッコブ川右岸などで地すべりが発生している。</p> <p>第8 火災</p> <p>火災は4月、5月の乾燥期に発生する火災と、11月から翌年1月までの暖房使用に起因する火災が多い。また、本町の地場産業である木工場関係の火災も多く、被害も大きなものとなっている。林野火災は近年、減少してきているが、最も乾燥し強風の多い5月に多く、たばこ、造林の火入れ、ごみ焼等が主な原因となっている。</p>	

現行（令和2年8月（平成31年3月））	修正案（令和6年1月時点）	備考
<p data-bbox="765 279 1397 321">資料8 過去の災害</p> <p data-bbox="151 422 427 453">第3節 想定する災害</p> <p data-bbox="181 468 1258 499">本計画においては、次のような災害を想定し、必要な予防対策、応急対策等を計画する。</p> <p data-bbox="765 554 1397 596">資料10 想定する災害</p> <p data-bbox="765 602 1397 644">資料11 地震の想定</p>	<p data-bbox="2041 279 2674 321">資料8 過去の災害</p> <p data-bbox="1427 422 1703 453">第3節 想定する災害</p> <p data-bbox="1457 468 2534 499">本計画においては、次のような災害を想定し、必要な予防対策、応急対策等を計画する。</p> <p data-bbox="2041 554 2674 596">資料10 想定する災害</p> <p data-bbox="2041 602 2674 644">資料11 地震の想定</p>	